

愛知県人口動向調査より
名古屋市の年齢別人口
 (平成16年4月1日現在)

概要

65歳以上の人口は前年比1万人余の増加、約6人に1人の割合

平成16年4月1日現在の本市の人口は2,191,869人で、前年4月1日(以下「前年」という。)より8,232人増加した。うち、0~14歳の人口(以下「**年少人口**」という。)は前年より1,527人減少し、15~64歳の人口(以下「**生産年齢人口**」という。)は前年より828人減少したのに対し、65歳以上の人口(以下「**老年人口**」という。)は10,591人増加した。

年少人口比率は、20年前には約5人に1人(21.3%)の割合であったのが、現在では約7人に1人(13.5%)の

割合に下がった。一方、**老年人口比率**は、20年前には約12人に1人(8.5%)の割合であったのが、現在では約6人に1人(17.6%)の割合に達している。

平均年齢は41.8歳で前年より0.3歳上昇した。また男女別では男性40.7歳に対し、女性43.0歳となった。この20年間で平均年齢は7.4歳上昇した。

年齢中位数は、常に平均年齢より下回っており、両者の格差は4年連続で1.0ポイントとなっている。また男女別では男性39.6歳に対し、女性41.9歳である。 [表1]

表1 本市の人口等の推移

(各年4月1日現在)

	総人口(人)			0~14歳 年少人口		15~64歳 生産年齢人口		65歳以上 老年人口		平均年齢(歳)			年齢中位数(歳)		
	総数	男	女	人口(人)	比率(%)	人口(人)	比率(%)	人口(人)	比率(%)	総数	男	女	総数	男	女
S59	2,094,576	1,045,890	1,048,686	445,378	21.3	1,470,637	70.2	177,422	8.5	34.4	33.5	35.3	33.8	32.9	34.6
60	2,104,694	1,050,659	1,054,035	436,907	20.8	1,483,152	70.5	183,496	8.7	34.8	33.9	35.7	34.2	33.3	35.1
61	2,113,860	1,054,875	1,058,985	427,639	20.2	1,493,988	70.7	189,697	9.0	35.1	34.2	36.1	34.7	33.7	35.7
62	2,128,054	1,062,095	1,065,959	416,709	19.6	1,512,581	71.1	196,228	9.2	35.5	34.5	36.5	35.1	34.0	36.1
63	2,136,239	1,066,406	1,069,833	404,375	18.9	1,526,246	71.4	203,083	9.5	35.9	34.9	36.9	35.4	34.3	36.6
H元	2,138,774	1,067,508	1,071,266	390,527	18.3	1,535,837	71.8	209,879	9.8	36.3	35.3	37.3	35.8	34.6	37.0
2	2,139,772	1,067,464	1,072,308	376,418	17.6	1,542,225	72.1	218,600	10.2	36.7	35.7	37.7	36.2	35.0	37.4
3	2,147,382	1,073,016	1,074,366	363,060	16.9	1,549,452	72.2	227,025	10.6	37.1	36.0	38.1	36.5	35.3	37.8
4	2,151,841	1,075,621	1,076,220	353,548	16.4	1,553,467	72.2	236,982	11.0	37.4	36.4	38.5	36.8	35.6	38.1
5	2,150,965	1,075,089	1,075,876	344,797	16.0	1,551,551	72.1	246,771	11.5	37.8	36.8	38.9	37.2	35.9	38.5
6	2,146,580	1,072,259	1,074,321	335,598	15.6	1,545,451	72.0	257,685	12.0	38.3	37.2	39.3	37.5	36.2	38.9
7	2,142,298	1,069,343	1,072,955	329,055	15.4	1,536,908	71.7	268,487	12.5	38.7	37.6	39.8	37.9	36.6	39.3
8	2,141,051	1,066,968	1,074,083	320,955	15.0	1,531,929	71.6	280,315	13.1	39.1	38.0	40.2	38.4	37.1	39.7
9	2,143,476	1,067,809	1,075,667	315,896	14.7	1,527,669	71.3	292,043	13.6	39.5	38.4	40.6	38.7	37.4	40.0
10	2,149,884	1,071,228	1,078,656	312,227	14.5	1,523,709	70.9	306,070	14.2	39.8	38.7	40.9	38.9	37.7	40.3
11	2,156,636	1,074,010	1,082,626	308,605	14.3	1,522,033	70.6	318,107	14.8	40.2	39.0	41.3	39.2	37.9	40.5
12	2,163,080	1,076,718	1,086,362	305,251	14.1	1,518,060	70.2	331,887	15.3	40.5	39.4	41.6	39.4	38.2	40.8
13	2,166,419	1,076,947	1,089,472	300,960	13.9	1,495,924	69.1	346,922	16.0	40.9	39.8	42.0	39.9	38.8	41.2
14	2,174,004	1,079,594	1,094,410	298,944	13.8	1,491,973	68.6	360,469	16.6	41.2	40.1	42.3	40.2	39.1	41.4
15	2,183,637	1,083,984	1,099,653	297,577	13.6	1,489,167	68.2	374,266	17.1	41.5	40.4	42.7	40.5	39.3	41.7
16	2,191,869	1,087,377	1,104,492	296,050	13.5	1,488,339	67.9	384,857	17.6	41.8	40.7	43.0	40.8	39.6	41.9

(注) 総人口には、年齢不詳を含む。

本市の人口ピラミッドをみると、平成 16 年 4 月 1 日現在の本市の人口構成は、55 歳前後と 30 歳前後にピークを持ち、星型に近い形となっている。20 年前（昭和 59 年 4 月 1 日）の人口構成では、35 歳前後にピークがあるものの、ほぼ壺型に近い形をしている。20 年間の変化では、55 歳以上の人口が急増しているのが目立つ。

また、昭和 59 年には、10 歳前後の人口（現在の 30 歳

前後に該当する）はそれほど突出しておらず、この 20 年間で 30 歳前後の人口が本市へ流入していることがうかがえる。

その一方で、ピラミッドの底辺を構成する年少人口の層は、20 年前の下方部が縮む分布とは異なり、ほとんど方型の分布になってきているが、規模は縮小しており、少子化の影響がその形に現れている。 [図 1-1、図 1-2]

図 1-1 本市の人口ピラミッド(昭和 59 年及び平成 16 年 4 月 1 日現在)

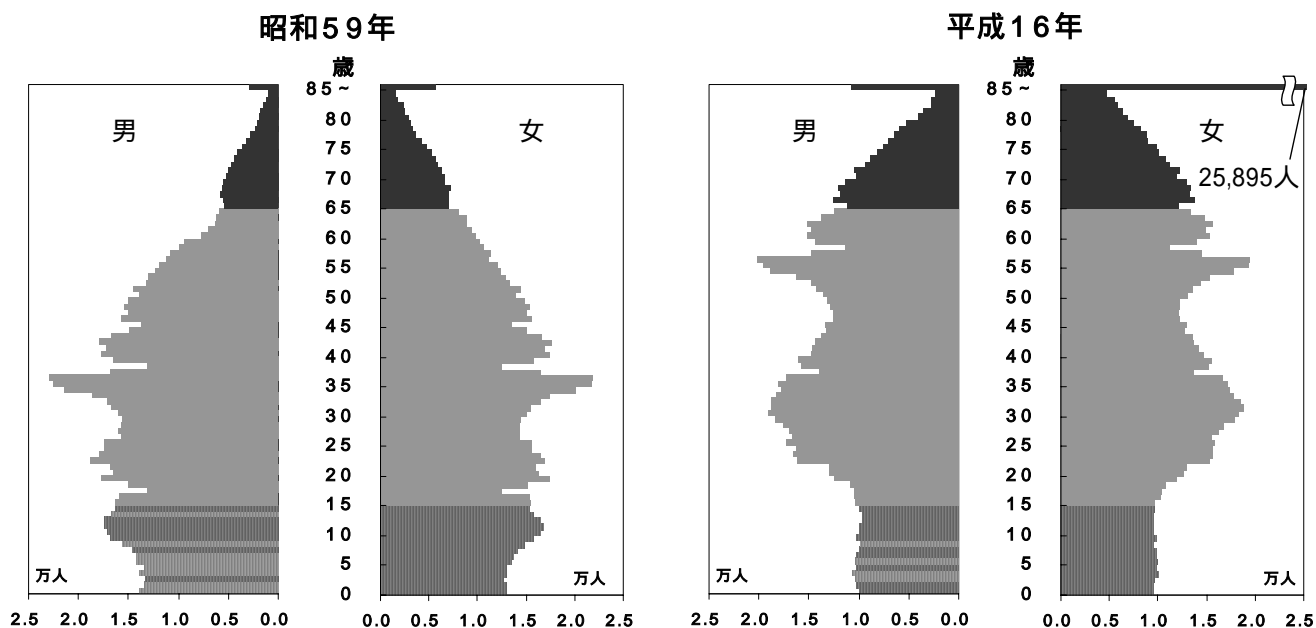
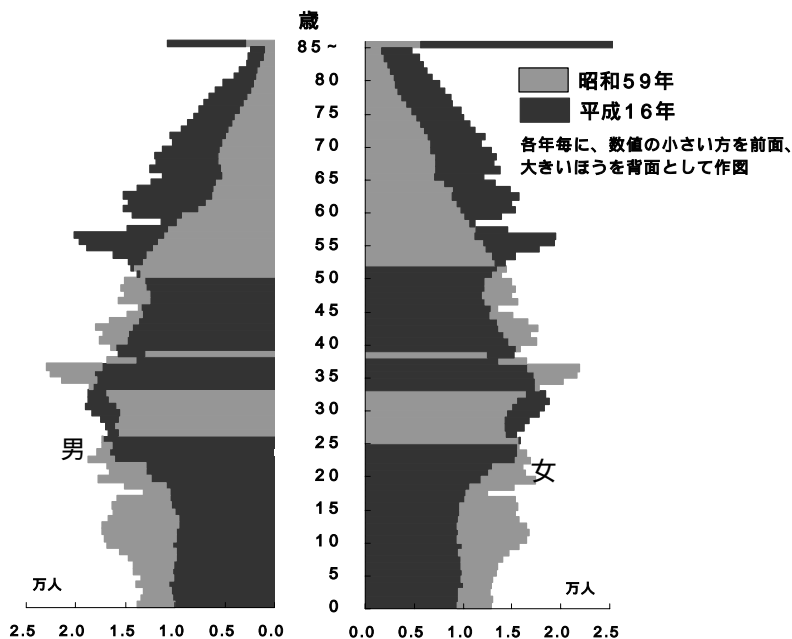


図 1-2 図 1-1 のピラミッドを重ね合わせた図



年齢 3 区分別人口

女性のほぼ 3 人に 1 人が被扶養人口

年齢 3 区分別人口の比率を男女別にみると、年少人口及び生産年齢人口では男性が、老年人口では女性が上回っている。

年少人口は年々減少しているが、直近 10 年間は、その前の 10 年間に比べ減少のペースが緩やかになっている。

生産年齢人口は、男女とも平成 5 年をピークに減少しているが、平成 13 年以降男女差が小さくなっている

老年人口は男女差が最も大きく、その差は年々拡大傾向にある。女性は平成 8 年に、男性は平成 14 年にそれぞれ年少人口を上回った。

[図 2]

各人口指標（数式等は「利用の手引（p.13）」を参照）の推移をみると、被扶養人口（年少人口及び老年人口）の生産年齢人口に対する割合を示す**従属人口指数**が、総数及び男性では平成 4 年、女性では平成 3 年をボトムに、上昇に転じている。特に、女性の平成 16 年の指標は 49.8 であり、これは、被扶養人口 498 人に対して生産年齢人口が 1000 人の割合であることを意味することから、ほぼ 3 人に 1 人が被扶養人口となっている。

年少人口に対する老年人口の比率を示す**老年化指数**は、平成 11 年に総数で 100 を超え、平成 16 年には 130.0 となった。男女別にみると、男性 109.1 に対し女性は 151.8 となり、20 年前（男性 31.9、女性 44.5）に比べポイント数の差は、男性で 77.2、女性で 107.3 であり、女性のポイント数の上昇がより激しい。

[図 3]

図 2 男女別、3 区分別人口の推移

(各年 4 月 1 日現在)

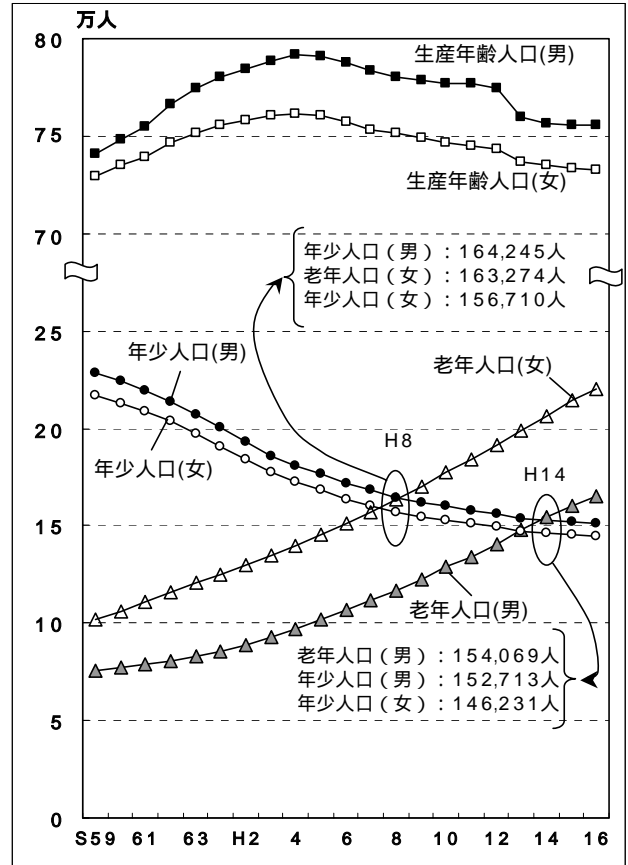
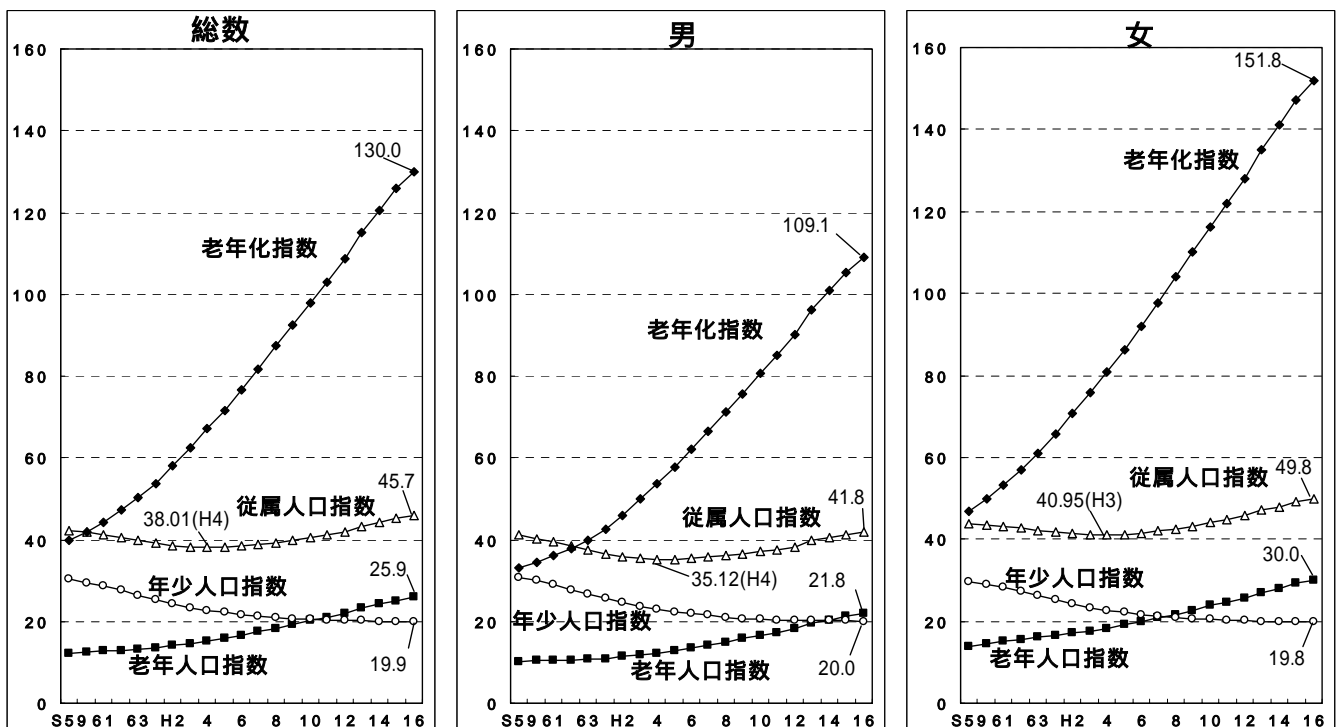


図 3 総数、男女別各人口指標の推移 (各年 4 月 1 日現在)



年齢 5 歳階級別人口

過去 10 年間は、昭和 44 ~ 48 年度生まれの人口がトップ

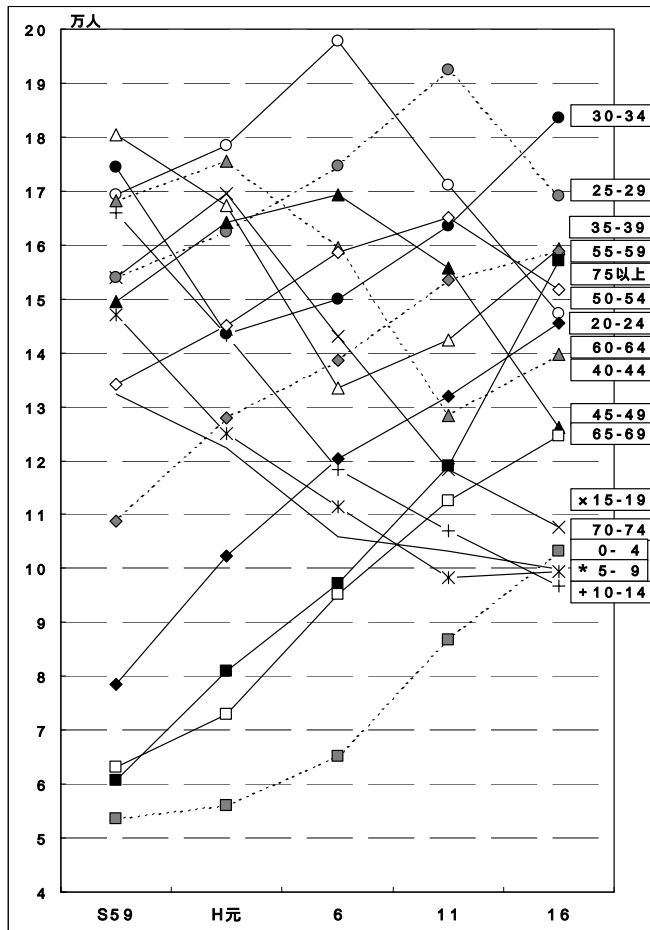
昭和 59 年以降について、人口の推移を 5 歳階級別にみると、平成 16 年で最も人口の多い年齢層は、30 ~ 34 歳となっているが、10 年前(平成 6 年)には 20 ~ 24 歳、5 年前(平成 11 年)には 25 ~ 29 歳と 5 歳ずつ移動している。この年齢層は昭和 44 ~ 48 年度に生まれた、第 2 次ベビーブーマーの中核となっている世代であり、過去 10 年間最も高い構成比を示している。

平成 16 年で 2 番目に多い 25 ~ 29 歳の人口は、5 年前に比べると約 2 万人減少しており、昭和 50 年度生まれ以降の少子化の影響が現れ始めた世代である。

一方、60 歳以上の人口については、どの 5 歳階級別の人口も 20 年前から一貫して増加しており、特に 75 歳以上の人口では、20 年前のほぼ 2.5 倍となっている。 [図 4]

昭和 59 年以降について、生年階層別の人口の推移をみると、「15 ~ 19 歳」時点(図 5 における ×)から「20 ~ 24 歳」時点(同)への推移で、いずれも人口の大幅な増加がみられる。 [図 5]

図 4 年齢 5 歳階級別人口の推移(各年 4 月 1 日現在)



参考図 全国及び名古屋市の合計特殊出生率の推移

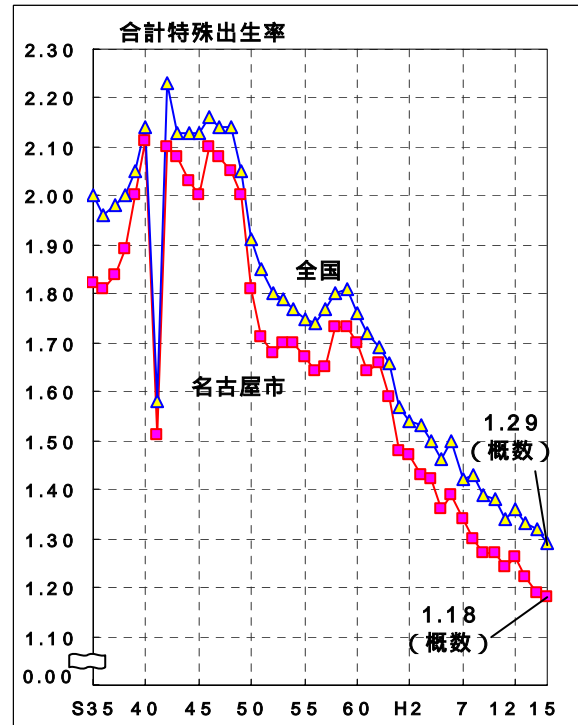
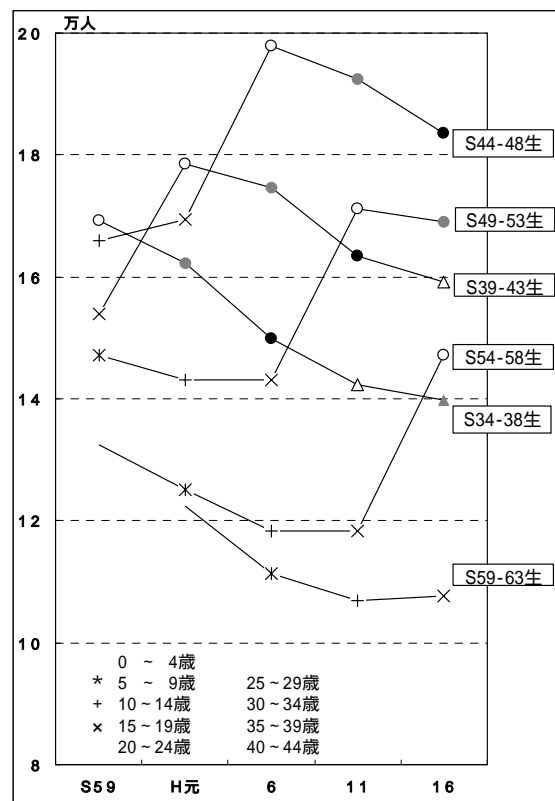


図 5 生年(年度)階層別の人口推移

(各年 4 月 1 日現在)



区別人口ピラミッド（年齢構成比）

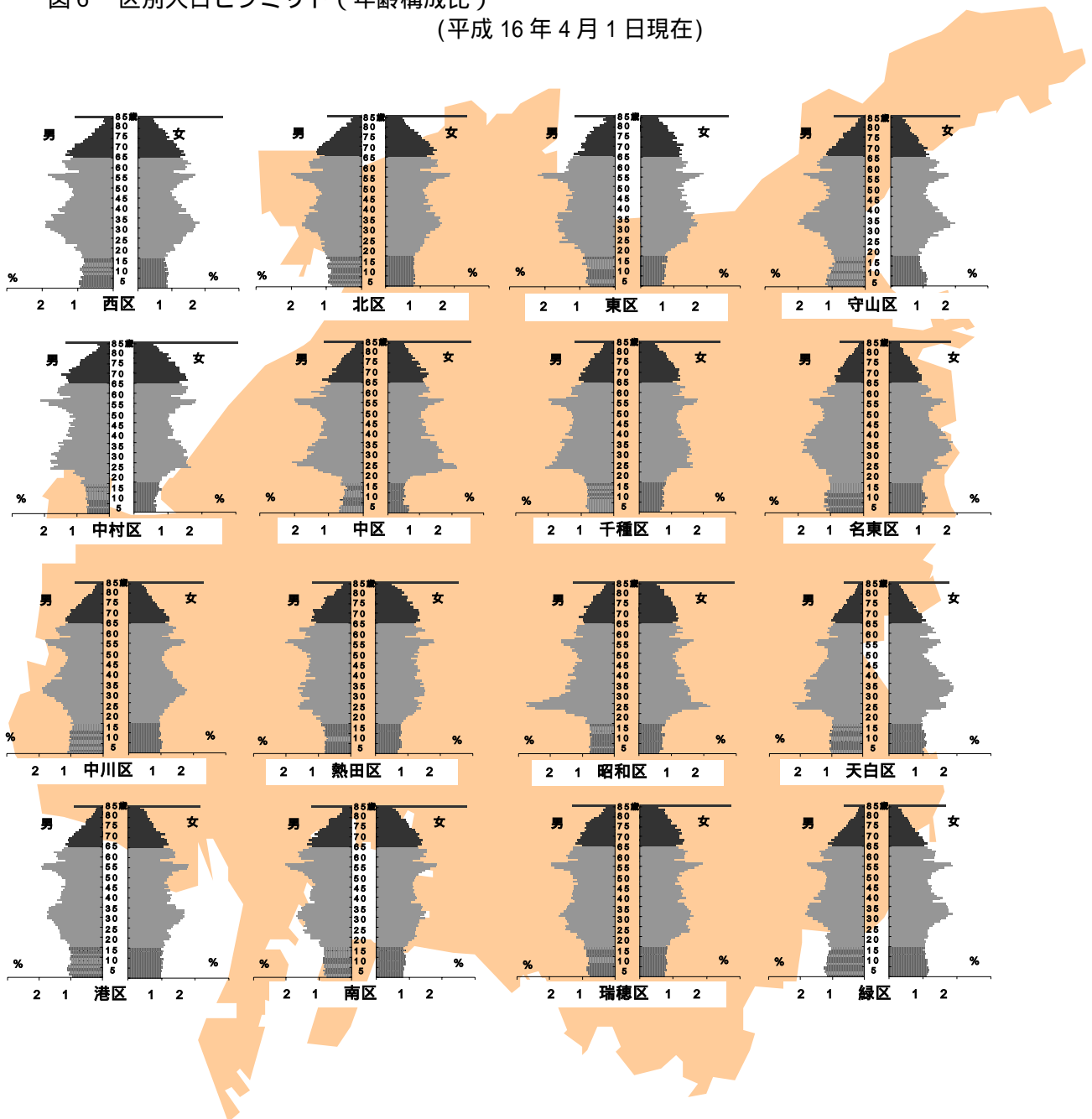
年齢構成比による区別の人口ピラミッドをみると、多くの区で本市の特徴である、55歳前後と30歳前後にピークを持った星型に近い形となっているが、都心の中区のほか、千種区、昭和区及び天白区では、25歳前後がピークとなっている。

年少人口については、年代が下がるに従い、守山区及び緑区ではやや末広傾向の分布であるのに対し、中村区及び南区では下方部が縮む傾向の分布である。

生産年齢人口については、各区とも45歳付近にくびれが見られる。25歳前後の男性の人口が突出している区があるものの、全体的に男女がほぼ対称となっている。

老年人口については、いずれの区もピラミッドの右側(女性側)が優勢となっている。本市の性比が100を下回っている(平成16年4月1日現在 98.5)要因の一つとして、この老年人口における男女数の不均衡が考えられる。[図6]

図6 区別人口ピラミッド（年齢構成比）
(平成16年4月1日現在)



区別年齢 3 区分別人口

年少人口比率は、東部の 4 区で高い

区別の年齢 3 区分別人口比率をみると、**年少人口**については、緑区が 16.8%と最高で、以下名東区、天白区、守山区の順となり、市の東部に位置する 4 区が上位を占めている。一方、最も比率の低い中区は 8.4%と、唯一 10%を下回っている。

昭和 59 年（20 年前）及び平成 6 年（10 年前）との比率の推移をみると、各区とも昭和 59 年から平成 6 年までの 10 年間の方がポイント数の低下が大きくなっている。中でも、名東区については、20 年間で 10 ポイントの低下と最大の減少幅であった。北区については、常に全市平均に近似した値で推移している。 [図 7、図 8]

生産年齢人口については、天白区が唯一 70%を超えている他は、全ての区で 60%台後半の値となっている。

その推移をみると、昭和 59 年から平成 6 年までの 10 年間については、全市平均が 1.5 ポイント上昇したが、港区、守山区、緑区及び名東区では大きく上昇している。平成 6 年から平成 16 年までの 10 年間は、全ての区でポイントが低下した。また、緑区を除く全ての区で昭和 59 年のポイント数を下回った。 [図 9]

老年人口については、中村区が 22.6%と最大で、以下熱田区、南区、瑞穂区と続いており、この上位 4 区が 20%を超えている。一方、最小は名東区の 13.5%で、以下天白区、緑区と続いているが、10%台前半の比率にとどまっているのはこの 3 区のみである。 [図 7]

図 7 区別年齢 3 区分別人口比率
(平成 16 年 4 月 1 日現在)

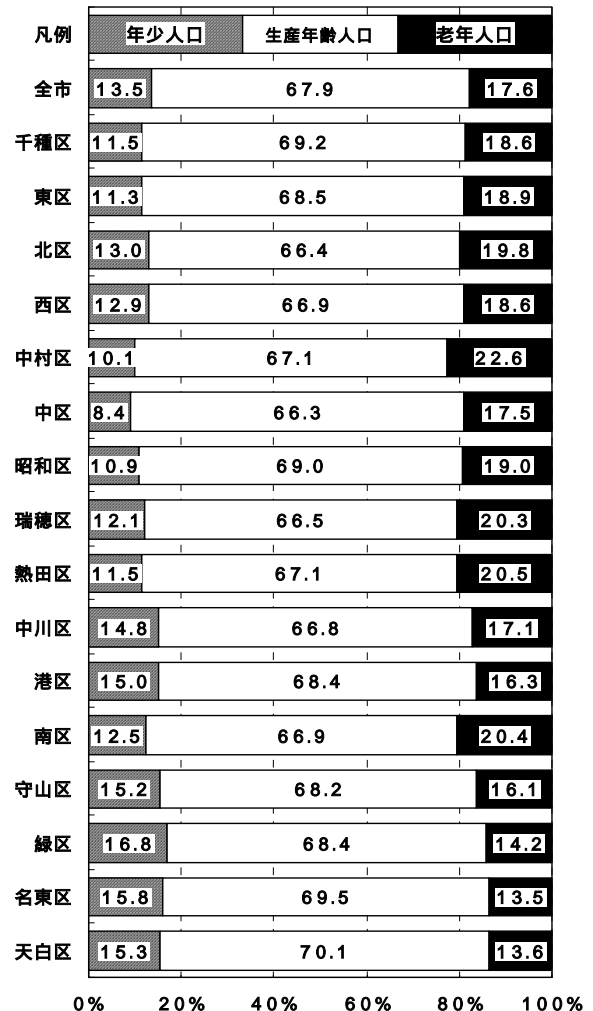


図 8 区別年少人口比率の推移 (各年 4 月 1 日現在)

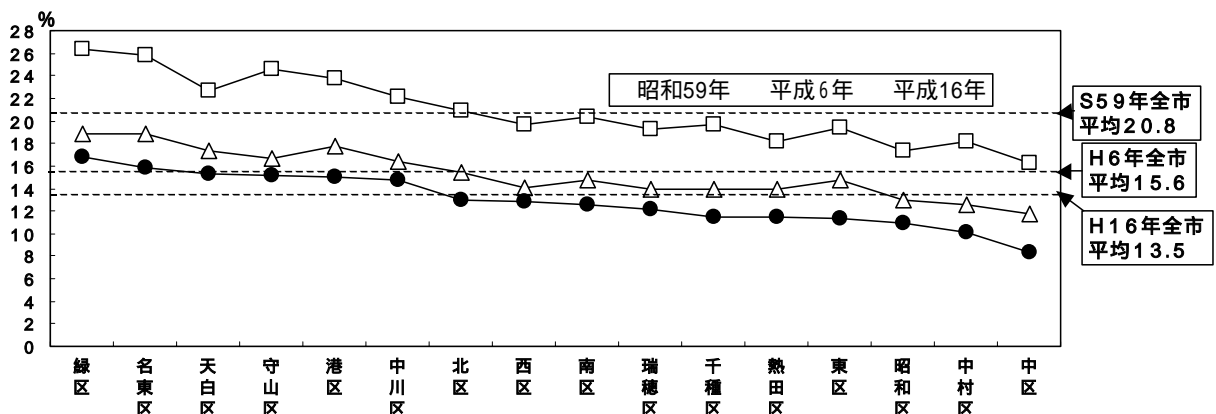


図9 区別生産年齢人口比率の推移（各年4月1日現在）

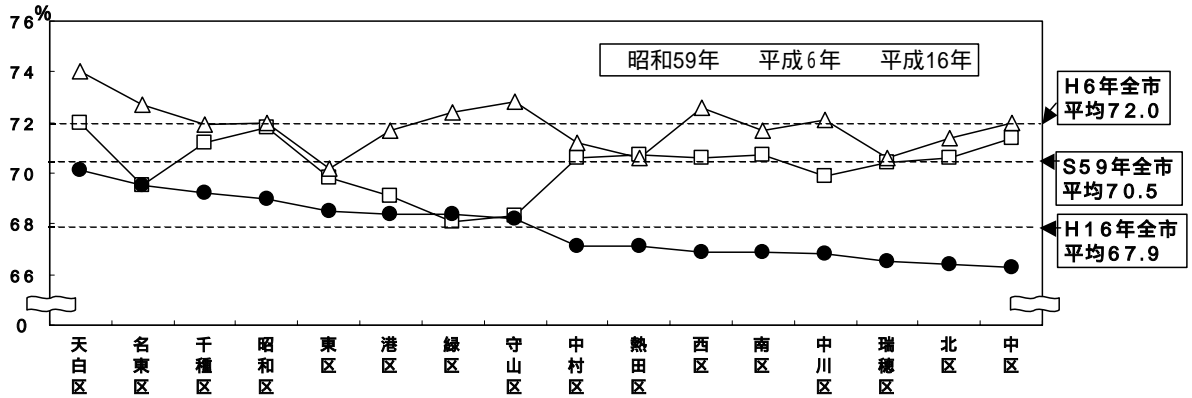
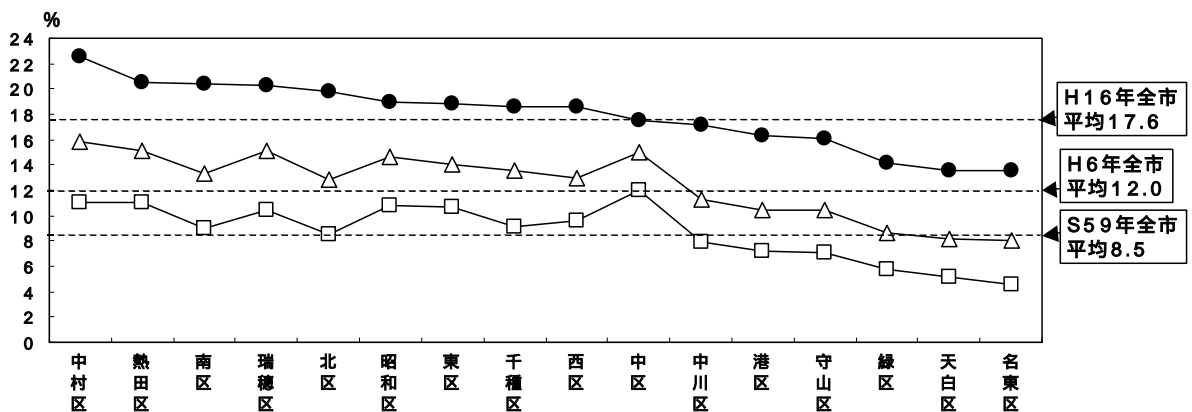


図10 区別老年人口比率の推移（各年4月1日現在）



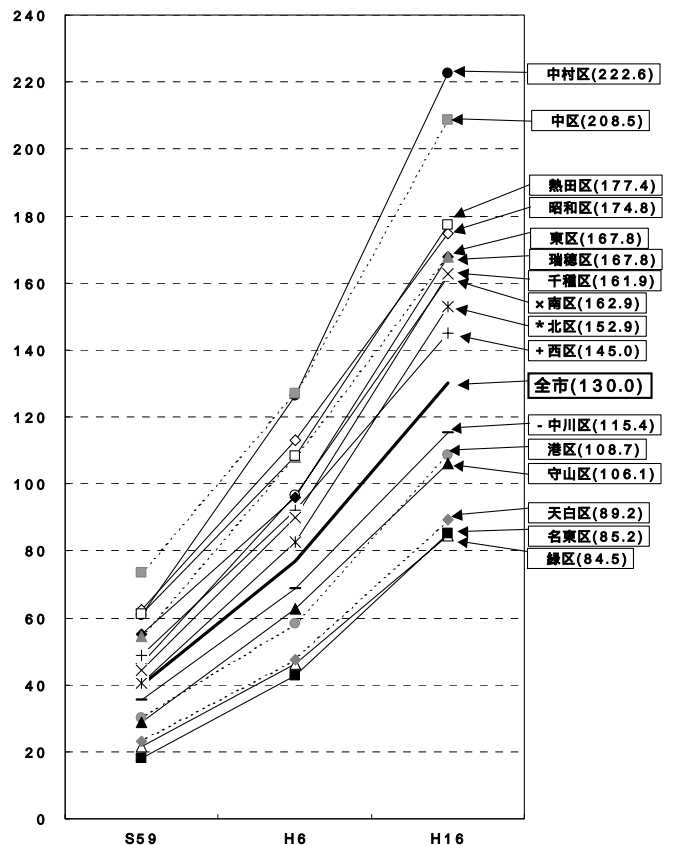
老年人口比率の推移をみると、年少人口の推移と比べ、昭和59年～平成6年までの上昇と、平成6年～16年までの上昇の幅に大きな変化は見られない。中区については、20年間の変動が最小となっており、その結果、昭和59年には比率が最大となっていたが、平成16年には、ほぼ全市平均並みとなっている。 [図10]

さらに各区別の老年化指数の推移をみると、20年前に比べ、各区の指数の開きが2倍以上に拡大しているほか、昭和59年から平成6年にかけての10年間の老年化よりも、最近10年間の老年化のペースが速くなってきている。特に中村区については、平成16年で222.6となり、20年間の上昇ポイントが161.9であり、その内訳は、昭和59年から平成6年にかけて65.5、最近の10年間で96.4となっており、いずれも最大である。

このほか、200を超過して老年化が進んでいる区は中区であり、208.5となっているが、昭和59年では73.6であり、当時では最大であった。

全市の指数を下回っている区は6区あるが、いずれも東部4区などの周辺区である。 [図11]

図11 区別老年化指数の推移（各年4月1日現在）



利用の手引

集計数値について

・この報告は、愛知県が県下の人口動向を明らかにすることを目的として実施されている、愛知県人口動向調査（愛知県統計調査条例<昭和26年愛知県条例第10号>）に基づき、名古屋市分について、平成16年4月1日現在の年齢別の人口の特徴をまとめたものである。

人口に関する指数等

$$\cdot \text{年少人口指数} = \frac{\text{年少人口（0～14歳人口）}}{\text{生産年齢人口（15～64歳人口）}} \times 100$$

$$\cdot \text{老年人口指数} = \frac{\text{老年人口（65歳以上人口）}}{\text{生産年齢人口（15～64歳人口）}} \times 100$$

$$\cdot \text{従属人口指数} = \text{年少人口指数} + \text{老年人口指数}$$

$$\cdot \text{老年化指数} = \frac{\text{老年人口}}{\text{年少人口}} \times 100$$

$$\cdot \text{平均年齢} = \frac{\sum Ci \cdot fi}{\text{総人口} - \text{年齢不詳人口}} + 0.5$$

ただし、Ci ... 年齢（0歳、1歳、2歳、...）

fi ... i歳の人口

$$\cdot \text{年齢中位数} = i + C \left(\frac{P/2 - F}{f} \right)$$

（人口を年齢順に並べて数え、ちょうど中央に当たる人の年齢）

ただし、i ... 中位数を含む年齢階級の下限值

f ... i歳の人口

C ... 年齢階級

P ... 総人口 - 年齢不詳人口

F ... 0歳～(i-1)歳の人口

なお、統計表中の年齢中位数は年齢各歳別人口により算出しており、上記式ではC=1となる。

合計特殊出生率

$$\cdot \text{合計特殊出生率} = \frac{\text{母の年齢別出生数}}{\text{年齢別女性の人口}} \quad 15 \sim 49 \text{ 歳までの合計}$$

15歳から49歳までの女性の年齢別出生率を合計したもので、1人の女性が仮にその年次の年齢別出生率で一生の間に生むとした時の平均子ども数に相当する。TFR (Total Fertility Rate) ともいわれる。

統計数値

・構成比等の内訳数値は、表章単位未満を四捨五入しているため、その合計は総数と必ずしも一致しない。

・「0.0」は表章単位に満たない場合、「...」は不詳、「-」は該当数値のない場合を示し、増減数としてのゼロは「0」としている。